KALS NEWSLETTER 69

2024年7月
九州アメリカ文学会
事務局　福岡大学人文学部　大島由起子研究室内
福岡市城南区七隈８丁目 19-1
〒814-0180

「ある学会の文学研究作法」

中村　嘉雄（九州大学基幹教育院教授）

スペインのサンセバスチャン、ビルバオの夏は意外と肌寒い。前学期末も見え、来学期、来年度の準備でざわざわし始める学校からひとり離脱する後ろめたさを「発表もあるから仕方なかろう」と独言を立て、７月１４日から２０日にかけて The Hemingway Society 20th Binnial International Hemingway Conference にやってきた。聞きたい発表の隙間時間の活用も国際学会の楽しみの一つである。サンセバスチャンから一時間ばかりかけヘミングウェイの代名詞、パンプローナの牛追い祭を見物に行った。毎年同月６日から１４日までだからなんとか最終日に間に合う感じである。*The Sun Also Rises*(1926)のフェイエスタの待ち合わせ場所で有名な The Café Iruña にはカウンターに座るヘミングウェイの銅像があるらしいがその日は見当たらない。「目当てに来たのに」と多少がっかりしたが雰囲気は十分肌で感じることができた。外の寒さと裏腹にカフェの熱気にウッとする。あたりに漂う牛舎の匂いに、酔いにまかせて踊り狂う部屋いっぱいの男女のいろんな酒と汗の匂いが鼻をつくちょっとした酒池肉林の店内。だからさしものヘミングウェイもこの日はご退席を余儀なくされたに違いない。同じく出席者の長年の友人は隙間時間をサンセバスチャンの海辺で体を焼くのに使った。肌寒いながらギリっと日差しが強いのがサンセバスチャンを含むスペインの特徴のようである。おそらく主人公のジェイク・バーンズもそのギャップを肌に感じたはずである。二時間で結構黒くなっていた。

良い文学には人の五感全てをゾクゾクさせるものがあるように思う。その味わいと楽しさを私は所属する日本ヘミングウェイ協会で学んだ。先達と同僚に本当に恵まれたと思う。今日もバルで日本のみんなと飲む。実はこれまでヘミングウェイ国際学会へは、本国アメリカに次いでわれわれ日本人研究者がダントツ多いのである。

地区だより

《沖縄地区》

加瀬　保子（琉球大学）

沖縄地区の最近の活動をご報告いたします。琉球大学の加瀬保子です。

今学期、琉球大学ではロサンゼルスにある Loyola Marymount University から Julia Lee 先生をフルブライターとしてお迎えしています。Lee 先生のご専門はアメリカ黒人文学とアジア系アメリカ文学ですが、クリエイティブ・ライターとしての顔もお持ちです。Julia Sonneborn というペンネームで 2018 年には *By the Book* という小説を出版されました。また昨年は本名で *Biting the Hand: Growing up Asian in Black and White America* というメモワーを出版なさいました。この著書の中では、ご自分とご家族が 1992 年のロサンゼルス暴動に巻き込まれた実体験について触れられ、アメリカ社会での黒人と白人の二項対立の狭間にモデルマイノリティとして置かれた上、「永遠の外国人」として見做され、ともすると無視されたりスケープゴードになってしまうアジア系アメリカ人の難しい立場について述べられています。Lee 先生は自らの経験と研究そして創作を通して、人種間の連携の可能性を模索されています。Lee 先生の講義は、学生のみならず、教員にとっても大変刺激を与えて下さるものとなっております。

琉球大学の小林正臣先生の論文"Before and After Humanity: Dia-Chronicity in *Moby-Dick*'s Chapter 104, "The Fossil Whale"が日本英文学会九州支部の発行する『九州英文学研究』（第 41 号）に掲載予定となっております。この論文は第 76 回支部大会での招待発表「人類以前と人類以後―『白鯨』第 104 章「化石鯨」における隔時性」をより発展させたものとなっております。

最後に加瀬自身の研究の状況をご報告させていただきます。来年 1 月の MLA の年次大会において、私が編者となっているアンソロジーのテーマに基づいたスペシャルセッションでパネル発表をさせていただくことが決まりました。このアンソロジーは *Emerging from the Rubble: Asian/American Writings on Disasters* というタイトルで，アメリカの学術図書出版社 Vernon Press より出版することになっております。Anthropocene 研究におけるポストコロニアルな視点の欠如を指摘すると共に、アジア系アメリカ人が戦争やグローバルキャピタリズムなどを含めた環境破壊行為や Climate Change にどのように関わってきたのか指摘するのが本著とパネルセッションの狙いです。

《熊本地区》

楠元 実子（熊本高専）

円安やインフレのあおりを受けて、特に海外の航空券、宿泊、食事の価格が高騰しております。勤務校では学生の海外研修を希望者参加とし、滞在期間を短縮するなど工夫して研修を再開させています。また、国内での教育や研究に関しても、オンライン授業、e-book での読書、AI の補助など、数年前には想像できなかった状況が一般的になってきました。このような変化のいい面も悪い面も両方とも学生に伝えていけたらと思います。さて、前回報告しました以降の研究会の活動を報

告致します。

〇第 166 回（2024 年 2 月 17 日）Zoom/熊本大学にて
題目： Bonnie Garmus 著 *Lessons in Chemistry* の“Lessons”とは
発表者： 池田 志郎
司会者： 楠元 実子
＊600 万部以上売れているベストセラー作品で、apple T+でドラマ化もされている Bonnie Garmus 作 *Lessons in Chemistry* についてのご発表でした。背景の解説の後、特にテキストの前半の抜粋から、男性優位社会に負けないエリザベスの考え方、多用される average という用語、カルヴィンとの対比などを読み解いてくださいました。また、タイトルの Lessons とはエリザベスがカルヴィンとの関係などから学んだことと結論づけられました。
フロアからは家系図を作ること、ドラマと原作との違い、英語の難易度などについてコメントや意見が出ました。また、1960 年代のアメリカの女性の描写から、同時代の日本の女性の状況とも比較がされ、ここにも化学現象/共感が生み出されていました。文学作品として今後この作品がどのように評価されていくか、引き続き見守りたいという意見もありました。

〇第 167 回（2024 年 5 月 11 日）Zoom/熊本大学にて
題目： Hemingway の短編小説 “Indian Camp”について
発表者： 角田 俊治
司会者： 池田 志郎
＊下記は池田先生にレポートいただきました。
Hemingway の“Indian Camp”についての研究発表であったが、議論は白熱して面白かった。同じ“camp”という語でも表すものが違ったり、young Indian woman を“lady”と呼びながらも、会話の端々に伺える医者である父親の偏見が表現されていることや、医者であることと白人であること、Indian の夫が自殺した理由、最後に George は一緒には帰らないことなど、いろいろな説が披露され、研究会参加者たちからも多様な意見が出された。短い作品ではあるが、Hemingway の技巧が詰め込まれた作品であることを再確認した。

《佐賀地区》

名本 達也（佐賀大学）

この原稿を書いている時点では、まだ梅雨が明けておりませんが、会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。
佐賀地区とは直接関係がないのですが、１件宣伝をさせて下さい。
日本英文学会・日本アメリカ文学会のサイトにも詳細を掲載していただいておりますが、９月７日（土）、８日（日）に、日本ヘンリー・ジェイムズ協会の第４回年次大会が、九州産業大学で開催されます。２日目は会員限定ですが、初日は会員以外の方も参加できます（参加費 500 円）。

協会が発足してから、九州では初の開催となります。また、特別講演には、九州大学の高野泰志先生を講師にお招きしております。

ご興味のある方は、是非ご参加ください。

《北九州地区》

齊藤　園子（北九州市立大学）

北九州地区からは、まず北九州アメリカ文学研究会のご報告です。今回も薬師寺元子先生より直接次のお便りを頂戴いたしました。

北九州アメリカ文学研究会の活動についてご報告します。第 20 回研究発表会を以下の要領で実施致しました。

日時： 2024 年 4 月 27 日（土）14：00〜17：00
会場： 北九州市立大学 北方キャンパス内 本館-304

［研究発表１］
題目　：映画 *Desert Flower* から学ぶ世界の現実
発表者：石田 もとな（鹿児島女子短期大学准教授）
司会　：村田 希巳子（北九州市立大学非常勤講師）

［研究発表２］
題目　：『礼記』昏義篇からみる婚礼の意義
発表者：篠原 征子（北九州市立大学非常勤講師）
司会　：薬師寺 元子 (北九州市立大学非常勤講師）

［研究発表１］では、石田もとな先生が、ソマリア出身のモデル、ワリス・ディリーの自伝をベースに制作された 2009 年公開の映画 *Desert Flower* に基づいて、アフリカの女性たちが置かれている状況について熱く論じられました。

［研究発表２］では、篠原征子先生が、『礼記』昏義篇の第 1 段からみる古代中国における婚礼を行う意義と現代日本における婚礼を行う意義とを比較対照し、婚礼の歴史と本来の意義を考察されました。

会員に加えて、学生、一般市民等、幅広い年齢層の方々にご参加頂き、それぞれの世代に応じた質問が出て、とても充実した、素晴らしい研究発表会となりました。また、後日、学生から、沢山の感想文やコメントが届き、研究発表会の意義深さを感じました。

2024 年 7 月 11 日　薬師寺　元子

そのほかですが、齊藤の方では、Kate Chopin の短編 “The Story of an Hour”と “The Storm”を扱う論考を『北九州市立大学外国語学部紀要』第 158 号（2024 年 3 月発行）に投稿させていただきました。SDG5（ジェンダー平等）や SDG17（パートナーシップで目標を達成しよう）に着目して推進した学内プロジェクトに関係する論考です。ご高覧いただけますと幸いです。また長年続けてきた英語模擬国連の取り組みの一環で、模擬国連ニューヨーク大会（NMUN New York 2024）に学生と参加して参りました。北九州市立大学の学生もがんばっております。参加報告を大学 HP に掲載しておりますので、ぜひご一読ください
［https://www.kitakyu-u.ac.jp/news/2024/05/004676.html］。

これからの行事ですが、九州アメリカ文学会 7 月例会が巽孝之先生をお迎えしてアクロス福岡で開催されます。例会のシンポジウムの司会・講師を、北九州地区の渡邊真理香先生（北九州市立大学）が担当されます。また 9 月には日本ヘンリー・ジェイムズ協会第 4 回年次大会が九州産業大学で予定されております。アメリカ文学関係でも楽しみな行事が続く夏となっております。

九州アメリカ文学会 7 月例会のお知らせ

九州アメリカ文学会では、毎年度 1 回目の例会を 9 月に行っておりましたが、今回は慶應義塾大学名誉教授の巽孝之先生のご講演をはじめ、 7 月に下記のプログラムにて実施いたします。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

7 月例会プログラム

日時：2024 年 7 月 28 日（日）15 時 00 分～18 時 00 分
場所：アクロス福岡 607 会議室

【特別講演】15 時 00 分～16 時 00 分
巽孝之（慶應義塾大学名誉教授／慶應義塾ニューヨーク学院長）
「批評理論と文学史の交わるところ」
【シンポジウム】16 時 10 分～18 時 00 分 「アメリカ文学と批評理論のこれから」
司会・講師 渡邊真理香（北九州市立大学）
「インターセクショナリティから考えるアジア系アメリカ文学 ——Light from Uncommon Stars における多層的な生」
講師 岡本太助（大阪大学）
「現代の悲劇はクリシェとなり果てたか——The Goat Or, Who Is Sylvia? から読み直すパロディと間テクスト性」
講師 鈴木章能（長崎大学） 「
日本人がアメリカ文学を読み、語るということ——ポストコ ロニアリズム・世界文学を経由したグローカル・アメリカ」

【懇親会】18：30～ 会場：オ・ボルドー・フクオカ （福岡県福岡市中央区西中洲 6-8）

《特別講演要旨》

「批評理論と文学史の交わるところ」

巽　孝之
（慶應義塾大学名誉教授／慶應義塾ニューヨーク学院長）

9.11 同時多発テロ以後、アメリカ合衆国を脱中心化する「トランスナショナル・アメリカン・スタディーズ」の方法論が勃興する。シェリー・フィッシャー・フィッシュキンの提唱で私を含む編集委員が招集され、2009 年に新しい学術誌 *Journal of Transnational American Studies* が創刊された。その十周年記念出版が *The Routledge Companion to Transnational American Studies*（2019）であり、昨年にはその成果をふまえた教科書『批評理論を学ぶ人のために』（世界思想社、2023 年）が出て、筆者も二章を書き下ろした。

しかし今年、邦訳を上梓したボストン大学歴史学教授ブルース・シュルマンの『アメリカ 70 年代』（原著 2001 年、国書刊行会、 2024 年）は、地域研究と時代研究のみならず批評理論と文学史の交わる地点を再検討する意味でも多くの刺激を与えてやまない。以上の角度から、 21 世紀批評の歩みと展望を概観する。

《シンポジウム要旨》

インターセクショナリティから考えるアジア系アメリカ文学
――*Light from Uncommon Stars* における多層的な生

渡邊　真理香（北九州市立大学）

1989 年に Kimberlé Crenshaw によって提唱された「インターセクショナリティ（交差性）」は、複合的で複雑な差別の構造へ我々の目を向けさせることに成功した。もちろん、インターセクショナリティという言葉が生まれる以前は多層的な生のありようが無視されていたという訳ではない。日系二世作家 Wakako Yamauchi が日系と女性という交差の苦しみを描いたように、アジア系文学では交差性は重要なテーマであってきた。一方で、アジア系文学にも主流が存在し、アジア系というエスニシティを語る主体を制限してきたことも事実である。その排他性によって周縁化されてきたのが、セクシュアル・マイノリティの物語である。1990 年代以降は、セクシュアル・マイノリティの存在を必然的に描く作家があらわれ、アジア系クィアの交差性がそれまで以上にはっきりと浮かび上がるようになった。本発表では、トランスジェンダーの少女を主人公とする SF ファンタジー小説 *Light from Uncommon Stars*（2021）を取り上げ、登場人物たちがどのような交差を生きているのか考察してみたい。

現代の悲劇はクリシェとなり果てたか
――*The Goat Or, Who Is Sylvia?* から読み直すパロディと間テクスト性

岡本　太助（大阪大学）

1980 年代以降、アイロニー、間テクスト性、翻案に関する批評を継続的に展開した Linda Hutcheon の問題意識の中心には、芸術におけるポストモダン・パロディとは何かという問いがあり、そこには Fredric Jameson に代表されるポストモダニズム論（標的を失った空疎なパロディとパスティーシュ）への明確な反駁を見て取ることができる。それはポストモダンの Poetics から Politics への重点のシフトにほかならず、adaptation と appropriation の差異とも連動している。いわばクリシェと化し批判的機能を喪失したパロディを現在の文脈において再活性化させようとするこの試みは、劇作家 Edward Albee の問題作 *The Goat Or, Who Is Sylvia?* が標榜する“Notes Toward a Definition of Tragedy”と呼応するのではないかというのが、本発表において論証したい仮説である。堆く積み上げられたパロディの残骸の上に幻出する現代の悲劇を素描してみたい。

日本人がアメリカ文学を読み、語るということ
――ポストコロニアリズム・世界文学を経由したグローカル・アメリカ

鈴木　章能（長崎大学）

解釈ならびに文学という概念の否定が斥けられ、いわゆるテクストへの回帰や読みの復権が訪れて久しい。もっとも、それは単に昔に戻ることでも理論からの解放でもない。むしろ、「読み」を巡る理論的課題は残されたままである。少なくとも日本人にとってアメリカ文学とは国民文学ではなく世界文学であり、従って読みのモードの視点を無視することはできない。かつて日本を訪れた某アメリカ人作家は、日本の英米文学研究者たちに、日本文学をなぜ研究しないのかと言ったようだが、認知言語学やメディア研究的な課題にまで広がる「理解」の溝の問題が念頭にあるようだ。それは理論そのものにも言える。例えばダムロッシュはかつて文学理論の翻訳と読みのモードの問題を問うていた。こうした課題に対し、地域性は類似性に担保される比較の中に浮かぶものであること、従って「内部者」と「外部者」の視点、地球規模の多様なローカルなまなざしの世界的集約（世界への発信と協力）を、アメリカ文学の「真」の姿に迫る豊かな知の蓄積の一方法として、人間理解や世界平和への貢献とともに考えたい。そのために世界文学の一方法としての言語対比研究を基とする類似性の対比研究、それを経由した脱オリエンタリズム・脱オクシデンタリズム・脱自民族中心主義／「アメリカ」の相対化（対照的ではなく多元的）／アメリカ文学の理解・理論の適応について（西欧発と思われている世界文学の現代的概念自体の相対化を例にしつつ）論じてみたい。

事務局からのお知らせ

1. 2024 年度日本アメリカ文学会第 63 回全国大会は、 10 月 12～13 日に中京大学（名古屋キャンパス）で開催されます。
2. 日本英文学会第 77 回九州支部大会は、 10 月 26～27 日、福岡大学で開催されます。
3. 九州アメリカ文学会第 70 回大会は、 2025 年 5 月 10～11 日に開催されます。
（開催は長崎で検討中）
4. 今年度も引き続き学会事務局は福岡大学に置かれています。

〒814-0180　福岡市城南区七隈 8-19-1　人文学部内
九州アメリカ文学会 TEL（092）871－6631
会費に関する問い合わせは高橋美知子先生(mtakaha@fukuoka-u.ac.jp)、 会費以外の件に関する問い合わせは大島(oshima-y@fukuoka-u.ac.jp)までお願いいたします。

（大島　由起子　福岡大学）

編集後記

猛暑が続いておりますが、会員の皆様におかれましては、おかわりございませんでしょうか。KALS NEWSLETTER　第 69 号をお届けいたします。今号は、7 月例会のプログラム・要旨等を掲載するため、原稿執筆を急にお願いすることとなってしまいましたが、いずれの皆様にも、迅速に対応いただきました。心からお礼を申し上げます。おかげさまで充実した内容となりました。
7 月 28 日、アクロス福岡にて多くの会員の皆様にお会いできますことを希望しております。なお、冬号には、この例会報告を掲載する予定です。
まだまだ酷暑は続きますが、健康に留意しながら、研究活動をがんばってまいりましょう！！

（江頭　理江　福岡教育大学）